

現代と社会システム 第03回課題(5/9 提出)

橋本 翔

環境情報学部 4年 70347929 t03792sh

1. 復習 『ルーマン理論の可能性』 p.128-156, p.176-188

「ダブル・コンティジェンシー」、「コミュニケーション」、「メディア」とそれらの関係性

従来、コミュニケーションは「情報の伝達」とされていた。一方ルーマン理論では、個体同士が相手の行動を観測し、意味解釈する事でコミュニケーションが行なわれる。これは「情報の伝達」ではなく、行為者 A が頭の中で考えた事を行為で表し、それを観察者 B が観測し、意味解釈しているだけだ。だから、コミュニケーションが意図した通りに伝わらない。考えを行為で伝達し解釈する間に、何か別のモノになっている可能性がある。

意図した通りに伝わらないコミュニケーションでは、解釈を元に相手の意図を「期待」する。これは相手の取れるたくさんの行動の中から相手の意図を「期待」し、またそれに対して自分の取るべき行動を「期待」する。この期待の偏りによって、秩序が生まれたり変化が起こったりする。

「メディア」は、ルーマン理論では世界の複合性を縮減する装置と定義される。例えば言語や通信技術や貨幣/宗教などの概念がこれに当たる。メディアを通す時（インプットし、何か処理が行なわれ、アウトプットされる）入力が同じなら出力は常に同じ結果になる。つまりメディアは複雑な処理を機械的に単純化する一定のルールだから、コミュニケーションの不確定性を少なくする効果がある。昔から人類は、複雑性を縮減し効率を上げる必要がある時に、メディアを発明し取り入れてきた。

（例えば、「貨幣」 物々交換で追い付かなくなった時、「言語」 身振り手振りで追い付かなくなった時、「自由や愛などの概念」 多様な価値観を持った人が同じ場所に集まるようになった時、など）

2. 予習『ルーマン理論の可能性』p.19-54

重要だと思った点とわからなかった点

「システムの閉鎖性」が、単なるインプット・アウトプット図式ではなくなっただけらしい。結局どうなったのか良くわからない。

ルーマン理論の目的が、我々が「世界の複合性を縮減」して把握できる様にする事であると共に、複合性の縮減は「システム」を見る為に不可欠なオペレーションとなっている。

我々は物事に意味を付ける事で、複合性を縮減している。そのモノを把握し、身近に感じることが出来る。例えば「沖縄で買ってきた帽子」とか地面が揺れている事を「神の怒り」とか。当然これは人によって縮減の仕方が異なる。つまり意味づけは、その物事を完全に理解したとは言えない。

社会学者が「一つの社会的な領域」を分析しようとする時、意味づけをしている。我々が「一つのシステム」として、つまりシステム内/外を区別するのは意味づけに依る。またこのため、社会学は無数の細かい分野に離散し、互いに連絡が取れなくなった。ルーマン理論は意味づけではなくシステムとして完全に把握し、縮減する事で、社会学各分野が互いに連絡を取れるような統一のアプローチになる。

自己準拠的なシステム：

システム、要素、関係の3つが同時に現れてくると言っている。どれかが土台になってシステムはできるのではなく、3つが相互に秩序を作るのに関わって、その時のシステムの姿ができる。

ルーマンの「社会システム」では、社会をシステムにとらえ、それは3つの要素から成る。

1. 個体の機能 2. つながりかたの構造 3. 創発

この3つの要素を内包するシステムが、トートロジー的に自分の新しい姿を産み出していくのが自己準拠的なシステムだ。

70年代と80年代の間で、オートポイエシスを取り入れてルーマン理論は進化した。システム/環境から、自己準拠的なシステムになったらしい。

視点：

モデリングをする時には常に視点が必要。ルーマン理論では、「社会をも一つの社会システムとして把握する」という視点と、「一つの社会的領域を自己準拠的なシステムとして捉える」という2つの視点を持っている。

また、システム論なので、この2つの間を行き来できる様になっている。

3. 考察

「自己準拠的システム」という閉鎖系として捉えるアプローチは、多分、問題領域を人の手で足りるサイズに納めつつも、システム理論として「問題領域の境界を拡大」し、社会全体までもカバーに入れられる様に互換性を持たせる考え方だと思う。

だが、社会システムのサブシステムである我々は、社会をシステムとしてモデリングしても、それが正しいかどうか確かめる方法は無いだろう。

4. 参考文献

- ・ 村中知子(著)、『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣、1996
- ・ マイケル・ポランニー(著)、佐藤敬三(訳)『暗黙知の次元』紀伊國屋書店、1980